楽曲紹介

エルガー
序曲『南国にて』Op. 50

解説＝等松春夫

古来イタリアに魅せられた作曲家は少なくない。英国の国民的作曲家エドワード・エルガー（1857-1934）もその一人である。1903年末から翌年初めにかけ、エルガーは妻子を伴って北イタリアの地中海沿いの町アラッシオに滞在した。このときの印象をもとに書いたのが『南国にて』である。ソナタ形式に倣ってはいるが、「展開部」に相当する部分が「ローマ人」とCanto popolare（民謡）という新たな2つの主題を中心に進められるので、実際には「ソナタ形式の序曲の衣を纏った交響詩」と言えよう。旅人が南国に到着した時の高揚した気分、群青色に広がる地中海、海岸までせり出した切り立った山々、羊飼いの牧笛の音色……。そして、いにしえのローマの栄枯盛衰への感慨が、練達のオーケストレーションによって描かれる。

短い序奏のあと、雄渾な第1主題が***mf***で主としてチェロとホルンによって奏される。高揚がおさまると、のどかな田園風景を思わせるたおやかでどこか官能的な第2主題を***pp***で弦楽器群が奏する。しばらく思索と逡巡が続くが、突然、稲妻の閃光と共に旅人の脳裏に古代ローマの幻想が浮かび上がる。かつてカエサルの軍勢がこの道路を進軍していったのだ。重々しい「ローマ人」の主題が***ff***のトゥッティで現れる。ティンパニと大太鼓が地響きのようなアクセントを打ちこむ中、この主題は65小節にわたり執拗に繰り返される。やがて旅人は再び現在に引き戻される。いつのまにか宵闇がせまり、点滅するグロッケンシュピールは星のまばたきを思わせる。遠くから響く牧童の歌。Canto popolareという憂愁を帯びた旋律が、まず独奏ヴィオラ、ついで独奏ホルンによって静かに奏でられる（この旋律は後に独奏ヴィオラやヴァイオリン用の小品に編曲された）。やがて再現部となり、曲頭の高揚した気分が蘇える。コーダでもグロッケンシュピールが活躍し、ティンパニの連打に導かれて第1主題が念を押すように***ff***でゆっくりとまず金管群に、続けて木管群により奏されて、輝かしく全曲が結ばれる。

1904年3月にロンドンで3日間にわたって開かれたエルガー作品のみを集めた音楽祭で自身の指揮で初演され、国王エドワード7世も臨御した。同年夏にエルガーは国王からナイト位を授けられて「サー・エドワード・エルガー」となる。ちなみにアラッシオには現在 Via Edward Elgarと名付けられた小路がある。

[作曲年代] 1903～1904年　**[初演]** 1904年3月16日、ロンドン、コヴェント・ガーデン「エルガー音楽祭」にて、ハレ管弦楽団の演奏、作曲者自身の指揮による
[楽器編成] フルート3（3番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール）、ハープ、弦楽5部

とうまつ・はるお／1962年米国パサデナ市生。防衛大学校国際関係学科教授。専攻は政治外交史・比較戦争史。オックスフォード大学博士（政治学・国際関係論）。主な著訳書に『日本帝国と委任統治』『なぜ国々は戦争をするのか』 A Gathering Darkness: The Coming of the War to Asia and the Pacific など。1991～97年の留学中に英国音楽の魅力に目覚める。エルガー『エニグマ変奏曲』、『南国にて』、『フロワサール』、『ソスピーリ』、ホルスト『惑星』等のスコア解説を執筆。英国エルガー協会とホルスト協会の会員。

クセナキス
ピアノ協奏曲第3番『ケクロプス』

解説＝野々村 禎彦

クラシック音楽の伝統的作曲法では、どんな大伽藍も動機＝煉瓦を積み上げて作ってゆく。だがイアニス・クセナキス（1922-2001）の作曲法は基本が違い、まず全体構造を音高と経過時間の2次元グラフでスケッチし、順次細部を埋めてゆく。その際に数学やコンピュータを駆使するが、あくまで細部を埋める便宜的手段であって本質ではない。ただし、作曲技法の変化に応じて作風も変化しており、3曲のピアノ協奏曲はその変化をよく反映している。

60年代前半までは、確率計算で密度のみを変えた音の雲を流し込んだ、一種異様な平板さが逆に個性になっていた。だが、「ふるいの理論」を用いて人工音階を生成すると様相が一変した。音階の構成音を単に流し込むだけでは垂れ流し旋法即興になってしまうので、細部から全体まで一貫した規則で生成する手法も併せて考案した結果、緻密な構造体の底から古代ギリシャ風

の旋律が漂う、圧倒的な作品群が生まれた。ピアノ協奏曲第1番『シナファイ』(1969)は、この時期の代表作のひとつである。

だが、システムで書ければ直感的にも書けるはずだと考えるのが創作者というもの。そして彼は「樹形図」という枝分かれする図形楽譜に至った。幹で基本構造を作ると枝葉が細部になり、回転や拡大縮小して敷き詰めれば大編成でも楽勝。ピアノ協奏曲第2番『エリフソン』(1974)の即興的な伸びやかさは、新手法初期の成功例である。しかし、封印していた人工音階を70年代後半に解禁すると質のばらつきが大きくなった。グリッサンド中心ならば良いが、音階が入るとやはり垂れ流し旋法即興になってしまう。

この問題点を解決したのが80年代の作品群であり、ピアノ協奏曲第3番『ケクロプス』(1986) はこの時期の代表作のひとつである。70年代後半で成功していたのは専ら打楽器作品だという省察からパルスを音楽の中心に据え、音階はまずパルスを構成する和音として現れ、声部がばらけるにつれて旋律になる。楽器法も打楽器にならって音色対比を強く打ち出した。そして生まれたのは、古代祭祀のような原初的エネルギーに満ちた音楽。数学的手法導入以前に探っていた、ギリシャの民俗音楽と現代ヨーロッパ音楽の融合という課題に、紆余曲折を経てたどり着いた。ちなみにケクロプスとは、ギリシャ神話に登場する半神半龍の初代アテネ王である。

『ケクロプス』の成り行きは、オーケストラのトゥッティのパルスに独奏ピアノが飲み込まれた状態で始まり、パルスがばらけるたびに浮上しては飲み込まれる過程を繰り返す。ピアノが撒き散らす音型や一緒に浮上する楽器は毎回違い、3分の1地点でカデンツァが始まる。そして折り返し点でオーケストラは朗々と歌い、ピアノは点描的な音型を弾き始めて風景は一変する。その後も往復運動は続くが、いったん視界が開けた後は時間の流れは加速する。最後は、冒頭に回帰した刹那にフェードアウト。さんざん大音量で盛り上がっておきながら、コーダも何もないのがクセナキス流。

今回の『ケクロプス』日本初演で、大井は3曲すべてを制覇した世界で唯一のピアニストになったが、前2曲もキャリアの節目で弾いている。井上／新日本フィルとの『シナファイ』は、ヨーロッパ留学直前の定期演奏会デビューであり、この演奏の真正性をクセナキスが絶賛して国際的キャリアが開けた。沼尻竜典／東京シティ・フィルとの『エリフソン』は、クセナキス没年の出光音楽賞受賞者公

演で、追悼演奏として日本初演された。

[作曲年代] 1986年　**[初演]** 1986年11月13日、ニューヨーク、リンカーン・センターにて、ロジャー・ウッドワードの独奏ピアノ、ニューヨーク・フィルハーモニックの演奏、ズービン・メータの指揮による
[楽器編成] フルート4、オーボエ4、クラリネット4（4番はバス・クラリネット持ち替え）、ファゴット4（4番はコントラファゴット持ち替え）、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、テューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、トム・トム3、ボンゴ2）、ハープ、弦楽5部、独奏ピアノ

ののむら・よしひこ／1966年東京生まれ。第1回柴田南雄音楽評論賞奨励賞を受賞し、音楽批評活動を続ける。クセナキス『形式化された音楽』（冨永星訳、筑摩書房、2017）の監訳の他、有馬純寿・川崎弘二編著『日本のライブ・エレクトロニクス音楽』（engine books, 2021）、川崎弘二編著『日本の電子音楽 増補改訂版』（愛育社、2009）、ユリイカ誌『総特集:大友良英』（青土社、2007）などに寄稿。

ショスタコーヴィチ
交響曲第1番 ヘ短調 Op. 10

解説＝増田良介

ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906-1975）の交響曲第1番は、18歳の作曲者が音楽院の卒業制作として書いた作品だ。1924年10月に着手され、翌年1月には第3楽章までが完成した。終楽章には苦労したようだが、書き始められると一気に進み、4月末には全曲のピアノ譜ができあがった。7月1日にはオーケストレーションも終了した。

当時の彼は、父の急死によって経済的困窮に陥り、映画館で伴奏ピアニストとして働くなど、苦しい生活を送っていた。さらに、映画館と給料不払いを巡って裁判になったり、友人が不治の病になるなど、彼の身辺には、気が滅入るようなできごとが相次いで起こっていた。ショスタコーヴィチは、ピアニストのレフ・オボーリンへの手紙の中で、それらについて嘆いたあと「（終楽章は）非常に陰気な、ほとんど、陰気では並ぶもののないミャスコフスキーのようなものになりました」と記し、当時の彼の憂鬱な気分とこの作品の関係を示唆している。

初演は、1926年5月12日、ニコライ・マルコの指揮するレニングラード・フィルによって行われ、大成功を収めた。その後まもなく、この曲は、ワルターやストコフスキーといった国外の名指揮者たちに取り上げられ、ショスタコーヴィチの名を世

界に轟かせることになる。

曲は、スケルツォを第2楽章に置く全4楽章構成を採用している。

第1楽章 アレグレット―アレグロ・ノン・トロッポ　ソナタ形式

トランペット独奏で始まる導入部のあと、行進曲風の第1主題がクラリネットで、ワルツ風の第2主題がフルートで出る。ヴァイオリン独奏で始まる展開部では、二つの主題のほか、導入部の主題も登場してクライマックスを築き、そのまま再現部に突入する。コーダでも小さな盛り上がりがあり、謎を残すように終わる。

第2楽章 アレグロ　三部形式

ショスタコーヴィチらしい戯画的なユーモアのあるスケルツォ。ピアノが独奏楽器として活躍する。

第3楽章 レント　三部形式

夢幻的な雰囲気の主部は、冒頭でオーボエの吹く主題のほか、『トリスタンとイゾルデ』を思わせるチェロ独奏の旋律や、何度も登場するタッタタターータタというファンファーレ風の特徴的な音型によって進む。中間部では、後年のショスタコーヴィチの作品にしばしば使われる葬送行進曲のリズムが現れる。主部が回帰したあと、切れ目なしに終楽章に入る。

第4楽章 レント―アレグロ・モルト　自由なソナタ形式

嵐のような提示部では、クラリネットによる半音階的な第1主題と、弦と木管による第2主題が現れ、その後は抒情的な部分と激しい部分がめまぐるしく交代しつつ進む。全休止のあと、ティンパニがソロで第3楽章のファンファーレ風の動機の反行型を打ち鳴らす箇所は特に印象的だ。コーダでは全楽器がこの動機を繰り返しつつ、高揚の中で全曲を閉じる。

[作曲年代] 1924～1925年　**[初演]** 1926年5月12日、レニングラードにて、レニングラード・フィルハーモニー交響楽団の演奏、ニコライ・マルコの指揮による
[楽器編成] フルート2（2番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、アルト・トランペット1、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タム・タム、鐘）、ピアノ、弦楽5部

ますだ・りょうすけ／音楽評論家。ショスタコーヴィチをはじめとするロシア・ソ連音楽、マーラーなどの後期ロマン派音楽を中心に、『レコード芸術』『CDジャーナル』誌、京都市交響楽団、東京都交響楽団などの演奏会プログラム、各社ライナーノート等に執筆している。